



TITLE:

南宋財政における會子の品搭收支

AUTHOR(S):

草野, 靖

CITATION:

草野, 靖. 南宋財政における會子の品搭收支. 東洋史研究 1982, 41(2): 290-320

ISSUE DATE:

1982-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/153857>

RIGHT:

南宋財政における會子の品搭收支

草野靖

はじめに

一 支遣分數

1 官吏俸

2 兵俸

3 給降和糴本錢

二 收納分數

1 租賦及び諸色官錢

2 務場入納

三 收支兩分數の關係

おわりに

はじめに

金主海陵王の南寇に備えて兵力を強化した南宋政府は、財政通貨の需要に迫られて紙幣發行の方針を定め、紹興三〇年（一一六〇）に臨安市中の豪商達が發行していた寄附兌便錢會子を官營に移し、翌三一年から行在會子を發行して畿甸兩浙及び淮南・湖北・京西路で行使させた。この會子は銅錢を本錢とする兌換券であった。それゆえ行在諸司諸軍の官吏將兵の給與に會子が支給されるようになった紹興三一年二月には兌換場として臨安市中に會子務六所が置かれ、淮南の軍費

への會子の支出が増えた隆興二年（一一六四）正月には建康府に會子務が置かれている。兌換券發行の狙いは、回流する紙幣の兌換請求に應じるために常時必要とされる本錢の量は紙幣の全流通量に比べて遙かに少ないという關係を利用して少ない銅錢でより多くの紙幣を運用し、當面の軍需を充たすことにあった。

しかし戰爭は兌換準備を超える紙幣の増發を招いた。紙幣の流通が悪化して財政が崩壊するのを怖れた政府は、和議成立後の乾道元年（一一六五）から經費の節減に努め、淮南軍需地帶を鐵錢と鐵錢を本錢とする紙幣交子の行使地として兩浙の會子發行額を抑制する政策をとり、更に二年十一月からは朝廷の蓄財を放出して會子を回収し、一舉にこれを廢絶しようとしたが、果さなかった。乾道四年五月再び新印の會子が發行された。ただしこの會子は前日の會子と違って銅錢に兌換されないものであった⁽¹⁾。

兌換を停止された紙幣がなお能く額面の價格を保って市中に流通した所以は、政府機關が、見錢と同様に、この紙幣を額面の價格に従って受納したことにあった。「夫れ會子は數寸の紙に過ぎず。而も乃ち泉貨と權を埒はかりしくするは、此れ他なし。官司が見錢となして入納するを許し、而うして市井に兌便する者稍衆ければなり」という時人の言葉は、これを指摘したものである。政府は紙幣を發行すると、官庫における見錢の收支雙方の各項目に就いて、官民が使用し得る紙幣の分率を定めた則例を設け、この則例に従って錢・銀と會子とを併用させた。分率をもって錢・銀・會子を併用することを品搭ひんたといひ、分率は分數・搭分などといった。品には率の意味がある。⁽³⁾本稿は南宋の財政收支においてこの會子の品搭が具體的にどのように行なわれていたかを考察するものである。⁽⁴⁾考察の範圍は、一應、行在會子の品搭制度が安定する淳熙年間までとする。

一 支 遣 分 數

先ず支出面における品搭から見えてゆくことにしよう。分數則例は會子が不換券と化した乾道四年五月以降のものに限ら

ず、それ以前のものも併示して参考に供することにする。また則例の考證のあとを逐一原典を引用して明示するのは煩雜にすぎるので、この手続きは省くことにする。

1 官吏俸

官吏俸の支遣分數に關する史料は甚だ乏しく、分數値の明らかなものは僅かに二例である。すなわち行在會子發行の始めに行在諸司百官の俸給は銀・會六四分品搭支遣と定め、その後乾道九年正月にいたって諸路の監司・州・縣・鎮・寨のあらゆる官吏の俸給をすべて錢・會中半支遣としたことが明らかであるが、中間の推移に就いては所傳がなく、乾道四年三月新會子發行決定後に品搭支遣が再開されたこと、七年二月に會子庫が罷められ官吏軍兵の俸給に錢銀が増支されたことが傳えられるだけである。

表1 官吏俸支遣分數

年	月	西曆	記事摘要
紹興三年三月		一一六一	行在諸司百官。以十分爲率。六分折銀。四分會子。
乾道四年三月		一一六八	諸軍諸司。皆分數支會子。
七年二月		一一七一	罷會子庫。仍賜戶部內藏南庫緡錢二百萬・銀九十萬兩。以增給官・兵之奉。
九年正月		一一七三	監司守臣并州縣鎮寨。將應于官吏俸給。並以錢・會中半支遣。

註 建炎以來繫年要錄卷一八九紹興三年三月甲午二二日條、建炎以來朝野雜記・甲集卷一六東南會子、宋史卷三四孝宗紀・乾道七年二月庚申一五日條、慶元條法事類卷三〇財用門・錢會中半・乾道九年正月二十九日敕、に據る。

乾道七年二月の都茶場會子庫の廢止は、このころ會子の弊害を説く者多く、廟堂の通貨政策が動搖していたことを示している。但し廢止の期間短く、間もなく復置されたはずである。⁽⁵⁾

九年正月⁽⁵⁾十九日敕による錢會中半制の施行には、中央政府の強力な指導監察が加えられていた。敕文では本州軍の糧審院が、毎月、文歷内に官吏俸として支遣さるべき見錢及び會子の數目を明記し、これに従って所屬の庫分より支給させ、本路の監司がこれを點檢して支出された錢・會の數目を文歷に記し戸部に申報するように指示されていたが、三月二十四日には、戸部より、指揮に従って浙東・浙西・江東路の諸州軍に委官を差遣し、官吏の俸給を點檢して、毎月、折支錢會文歷を戸部に申報させることにしたが、兩浙路の溫・台・明・處州平江府及び江東路の諸州軍よりは未だに文歷が提出されないと上言し、これら府州軍の「點檢會子官」に對して、各々指揮に従って早急に文歷を申報せよ、とりあえず文歷の申報が遅れた事情を具體的に記して尙書省に上申せよ、という詔が降されている。⁽⁶⁾九月十九日には、台州の被災の民の賑濟に就いて「見差在本州措置會子官・監登聞鼓院耿延年」と本州の守臣とが共同して措置せよと詔が降されている。⁽⁷⁾翌淳熙元年（一一七四）正月庚子十二日には、衢州の守臣ならびに本路の監司が「會子を措置して文歷を申繳する（措置會子申繳文歷）」のが他州より遅延したということで、提刑使趙彥端が兩官を降されている。⁽⁸⁾中半制施行後一年以上にわたって毎月の官吏俸の支遣に就いて戸部の監察指導が續けられたことが明らかであろう。錢會中半制が容易には徹底しなかったことがわかる。その理由は、一つには恐らく官吏自身が會子で俸給を受けるのを嫌っていたからであろう。また一つには會子の流通が地域的に偏っていたためであろう。上記の州軍のうち、溫・台・處州は「不通水路州軍」（後述參照）である。兩浙江東の諸州軍に派遣された委官が、始めは點檢會子官と呼ばれ後には措置會子官と呼ばれているのも、見過せないところである。措置會子官は恐らく俸給の支遣に必要な會子を調達する職責も擔っていたことであろう。そうしなければ、現地に會子が無いという理由を擧げて官吏が見錢のみで俸給を受けるのを防止できないからである。

2 兵 俸

三衙及び沿江諸軍の將兵の給與の支遣分數の推移は別表の如くである。⁽⁹⁾分數値の明らかなのは二例である。すなわち

表2 三衙沿江諸軍俸支遣分數

年 月	西 曆	摘 要
紹興三年三月	一一六一	行在諸軍。所有月支券食等錢。五折銀。三分見絹。二分會子。
乾道二年三月	一一六六	淮東諸軍俸への品搭始まる。
二月	一一六六	官司並以錢銀支遣。三衙全支銀錢。
三月七月	一一六七	三衙將兵への品搭復活。
四年三月	一一六八	諸軍諸司皆以分數支會子。
七年二月	一一七一	罷會子庫。仍賜戶部內藏庫緡錢二百萬・銀九十萬兩。以增給官・兵之奉。
八年二月	一一七二	諸軍。衙官七人例以上。二分錢・三分銀・五分會子。五人例以下。三分錢・四分銀・三分會子。軍兵折麥餐錢全支見錢。使臣折麥料錢・統制軍佐供給分數依舊。
紹熙三年	一一九二	屯戍官兵每旬支遣。已有立定錢銀會子分數。

註 建炎以來繫年要錄卷一八九紹興三十一年三月甲午二日條、建炎以來朝野雜記・甲集卷一六東南會子、同上及び宋史卷三三孝宗紀・乾道二年一月己酉九日條、建炎以來朝野雜記・甲集卷一六東南會子、同上、宋史卷三四孝宗紀・乾道七年二月庚申一五日條、宋史卷一九四兵志・廩給之制、楊萬里・誠齋集卷七〇乞罷江南州軍鐵錢會子奏議、に據る。

行在會子發行の始めに行在諸軍の給與(券食錢)は五分銀・三分錢・二分會子の品搭支遣と定め、降つて乾道二年三月から沿江大軍の給與も會子の品搭が始められたようであるが、同年十一月から會子の回收が始められて品搭が停止された。しかし會子を廢絶することはできず、三年六月およそ五百萬貫を残して回收は停止され、七月己亥四日存留會子の三衙將兵俸への品搭支給が再開された。翌四年三月には新會子發行の方針も決まり、諸軍諸司への分數支遣が復活する。そして七年二月、一時會子庫を罷め内藏南庫の蓄財を放出して官・兵の俸に錢銀を増支するという政策の變更があつてのち、翌八年二月から「毎月の券食は錢・銀を増支して會子を減落する」という方針を具體化して、衙官七人例以上は錢二分・銀三分・會子五分、衙官五人例以下は三分錢・四分銀・會子三分という分數則例が施行されている。

乾道二年三月から沿江諸軍俸への會子の品搭が始まったというのは、建炎以來朝野雜記甲集卷一六東南會子に、この年のこととして「時に會子初めて行なわれ軍中多く以て不便と爲す。鎮江都統制郭振、總領趙公稱と陳有り。奏して乞う、『見繼に易えて本軍に付せられん』⁽¹⁰⁾と。上以て輔臣に諭す。洪丞相曰く、『楮幣は在處に行なう可し。たゞ須^{かならず}ず本錢の稱提するを得れば乃ち可なり』と。遂に命じて之れを淮東に行なう」と記し、これに三月辛亥八日と註記するのに據る。

行在會子は紹興三十一年七月乙未二十四日の詔で初めて淮浙湖北江西路州軍に行使され、「其の諸軍起發等の錢も並びに會子を以て品搭して支給せよ」と指示されている。この會子が乾道二年三月まで沿江諸軍俸に支遣されなかったというのは理に合わぬようであるが、しかし宋會要輯稿・職官五七俸祿・隆興元年（一一六三）十月二十一日條には「詔す。見今軍人出戍す。其の效用の軍兵の食・料錢及び五人衙官以上は、並びに見錢を支給せよ。變轉して減折するに致るを免れん」と見えている。また洪丞相は紹興三十二年四月から隆興二年二月まで總領淮東財賦軍馬錢糧の任にあったのであるが、同人の盤洲文集卷四二戍兵請給驅磨阻滯劄子には、鎮江諸軍出戍の際には從來都統司が出戍地の遠近と人數とによって預め總領所より二ヶ月もしくは三ヶ月分の錢米の支給を受けるのが慣例であることを述べて、一節に「月糧米・折麥錢并びに新添錢米の存留して老小に養贍するを除くの外、其の預勘の銀子及び公據は、出軍の日に鎮江に就きて一頓^{いちど}に支請し、錢物に變轉して路費を置辦し、及び分留して家を贍くるに係わり、其の二分の見錢及び口食米は、即ち軍前に就きて逐旬支請す。云々」と記しており、やはり會子は支給されてはいない。ただしこの劄子の前に收録される「會計軍儲劄子」には、「海州には米四萬六百石有り。軍食一年を給す可し。錢・銀・會子五萬貫料七百石有り。一月を支す可し」などに見えていて、軍費に會子が支遣されていたことが明らかである。恐らく會子は兩替の煩勞と損失とを案じて、隆興二年十二月の和議成立までは兵俸には支給されず、もっぱら兵俸以外の軍費に支用されていたのではないだろうか。

しかし乾道元年の戸部の歲計は三百萬貫が不足し、十二月には會子一百萬貫を増印しなければならなかった。翌二年にはまた二百萬貫が増印されている。そして二月壬辰十八日、戸部より毎月の官・兵の俸料の見錢分數を減らして毎月二十

萬貫の見錢を節約しようという案が出されるが、兵士の動搖を恐れて取り止めになっている。沿江諸軍俸への會子の品搭はこの見錢の不足に對處したものでなかったかと推測される。⁽¹¹⁾

乾道八年二月制定の分數則例にいう「衙官七人例」「五人例」は兵士の給與の等級を示す呼稱である。兵士の給與は「券錢」といい、「衙官券」をもって支給され、最高の衙官十二人例以下、十人例、七人例、五人例、三人例の五等があり、馬軍效用は五人例に、步軍效用は三人例にあてられていた。その給與額は十二人例が日支一貫六百元、十人例が一貫二百、七人例が八百、五人例が六百六十六文、であつたようである。⁽¹³⁾ 衙官の實態は明らかでないが、宋史卷一七二職官・奉祿制・給券を見ると、高級武官の出使の際は賓幕・軍將・隨身・牙官等を隨行させることが記されている。恐らくこの牙官一人に對する一日の給與を基準として、その三人分・五人分・七人分と給與額を定めたものであらう。

十二人例を超えると將校になる。宋會要輯稿・職官五七俸祿・乾道九年六月十二日條の詔に「使臣元請七人例以上並びに將校都處候請給の人」という言葉が見え、また同書・兵一五歸正・乾道三年四月二十六日條に、歸正の北軍並びに忠義の人に對して口食米を増支せよと聖旨をうけた建康都統制劉源が、これら歸正の軍民の中には已に官資高く請給優厚なものがない、一律に添支することはできぬとして「今相度す。見に統領將佐に充たるもの並びに衙官十二人及び七（衍字）十・七人例の券錢を請うもの計六十二人は、更に増給せず、衙官五人券錢已下並びに效用の軍兵計七百四十人は、等第量増せよ」と措置したと記すのは、この關係を知らせるものである。乾道八年二月の分數則例は、兵士の給與を衙官七人例以上と五人例以下との二層に分ち、錢・銀・會子の品搭分數を定めたものである。下級兵士に錢銀を増支し會子を減支しているのは、會子の額面價格（官給價格）と市價との差額より生ずる損失（變轉減折）が少なくて濟むように優遇したものであらう。

統制・統領・正將・副將・準備將などの將校は、一般の官僚と同じく料錢文歷が與えられ、それぞれ官階に應じて俸錢が支給されていた。また俸錢の外に、その職責に對する「供給錢」として、統制に月額一五〇貫、以下遞減して準備將に

月額三〇貫が與えられていた。⁽¹⁴⁾

なおこの則例は基本原則であつて、錢銀の分數は會子の流通状況を見て増減されることがあつたようである。⁽¹⁵⁾ また將兵は俸給の外に定例・臨時の犒賞があり、これにも多額の會子が用いられていたが、今は觸れない。

3 給降糴本錢

紹興初期の見錢關子はもっぱら糴本に使用されていた。紹興六年（一一三六）二月に行在交子務が置かれたときは、廣南福建等六路交子三十萬貫、兩浙交子一十萬貫、臨安府界小交子一十萬貫、江南兩浙預充糴本交子一百五十萬貫が印造されてゐる。⁽¹⁷⁾ また南宋末景定四年（一二六三）二月以降施行された賈似道の公田法は、公田の租米を軍糧に充て、毎年兩浙・江東・江西の州軍で八百餘萬斛の軍糧の和糴が行なわれこれに七八千萬貫の紙幣が印造支出されて紙幣市價の下落を激化させてゐる事態を改めようという狙いを持っていた。⁽¹⁸⁾ この前後の二例から推して、會子は特に軍糧の和糴に多く支出されていたと考えられるが、和糴本錢の品搭分數を傳える史料は乏しく、分數値を確認できるのは僅かに一例である。

先ず宋會要輯稿・食貨四〇市糴糧草・乾道二年五月十八日條に、戸部より糴本錢一百萬貫を錢・銀・會子を品搭して支降したことが記されるが、分數は明らかでない。四年五月三日條には、今後は見錢關子・末茶引・度牒・乳香等を糴本に使用することを罷め替りに新印の會子を品搭支降することとして、浙西路鎮江府、江東路建康府・池州、江西路隆興府に、錢・銀・會子を品搭して、それぞれに二五萬貫、五〇萬貫、一二萬五千貫、三七萬五千貫の本錢を降付し、一〇萬碩・二〇萬碩・五萬碩・一二萬碩の米を收糴させたことが記されている。本錢の構成を見ると、會子がそれぞれ一四萬貫・二八萬貫・七萬貫・二二萬貫で、残りは錢・銀中半である。従つてその比率は何れも錢銀各々二二%、會子五六%となる。

次に止齋先生文集卷五一右奉議郎新權發遣常州借紫薛公（諱季宣）行狀によると、乾道七年知湖州であつたときのこと

として、「而るに大農の和糴六萬石は、銀・交子を以て高く估り、徒に錢二千省を用いて米一石を得んとす。郡は市直を裁つに忍びざれば、當さに錢萬六千緡を補なうべし。儼載の費これに與らず」と記し、薛季宣の浪語集卷一八湖州與梁右相書によると、「只だ和糴の一事の如きは、本州の苗米は五萬斛に止まり常州は三十四萬なるも、今歳の抛降は皆六萬碩にて、既に均當ならざるに、復た三千省の銀・會を以て高く估り足斗一碩を糴取す。銀は三貫五百五十と作し、會子は七百七十として科折す。……即え盡く實錢二千足を支して一省碩を糴すとも、猶お恐らくは未だ本價に當らざらん」と記している。因みに梁克家が右丞相の地位に在ったのは乾道八年二月から九年十月までである。乾道七年當時糴本錢が銀會を品搭して支降されていたことが明らかであろう。ただ右の記事では銀・會の分數は判らないが、乾道八年のものと推定できる蔡戡の定齋集卷四論擾民四事劄子に、「夫れ和糴は荒歲に備うる所以なり。要は當さに官自ら場を爲むべし。時値の高下に視て少しく之れを増し、吏胥侵漁の姦を痛戢すれば、則ち人將さに負擔して至らん。今や價値を量立し半ばは楮幣を以てす（量立價値、半以楮幣）。云々」と見えているから、銀・會中半であつたと見てよいであろう。

二 收 納 分 數

1 租賦及び諸色官錢

次に收納分數に就いて考察する。先ず租賦ならびに諸色の官錢の輸納・起解分數の推移を見ると、別表の如くである。行在會子が淮浙湖北京西路州軍に初めて行使された紹興三十一年七月には、沿流諸州軍の上供等の錢は錢・會中半解發、不通水路州軍は全會起發を許すと定められたが、その後戰費支辨のために濫發された會子の回收が企てられると、會子の起解分數は二分から更に一分へ減らされ、遂には品搭が停止される。

新會子が發行されると品搭が再開され、人戸から州縣等政府機關への租賦官錢の輸納、下級政府機關から上級或いは中

表3 租賦官錢輸納起解分數

年 月	西 曆	諸司州縣起解分數	人戸輸納分數	人戸交易	備 考
紹興三二年七月	一一六一	沿流州軍錢會中半 不通水路十分會子			
乾道二年六月 一〇月	一一六六	八分見錢二分會子 沿流州軍九分見錢 一分會子、不通水 路十分銀兩 沿流州軍十分見錢 不通水路十分銀兩			自來年正月施行
一二月		錢 會 中 半	錢 會 中 半	錢 會 中 半 聽 從 民 便	自來年正月施行
四年五月	一一六八	七分見錢三分會子	屯駐軍馬地		
七年正月	一一七一	不係屯軍地、九分 見錢一分會子、屯 駐軍馬地、錢會中 半(但折帛錢)	錢 會 中 半	聽 從 民 便	
八年三月	一一七二				
九年正月	一一七三	錢 會 中 半	錢 會 中 半	聽 從 民 便 不拘錢會分數	

註 建炎以來繫年要錄卷一九一紹興三二年七月乙未二四日條、宋會要輯稿・食貨四漕運・乾道二年六月四日條、同年十月五日條、同食貨四八陸運・乾道二年十一月九日條、慶元條法事類卷四七賦役門・受納稅租・乾道四年五月五日敕及同書卷八〇雜門・出舉債負及雜犯・同年月日敕、宋會要輯稿・食貨六四上供・乾道七年正月二十日條、慶元條法事類卷三〇財用門・錢會中半・乾道八年三月十三日敕、同上・乾道九年正月二十九日敕、に據る。

央の政府機關への租賦官錢の解發上供のすべてに就いて錢・會中半制が施行された。乾道四年五月五日の敕に「諸路の監司、州縣の守〔令^脱〕の處より起解する官錢、及び人戸が輸納する一切の稅賦（人戸應干輸納稅賦）、並びに諸色の人・僧道

が合さに納むべき諸色の官錢は、會子見錢を以て對半にて送納せよ」と見えている。民間の交易における會子の使用に就いては、同じく五月五日の敕に「會子を行使するに、邀阻減剋するを得ず。如し違戾有れば、諸色の人が所在にて陳告するを許し、每名賞錢五十貫を追す^(給)。犯人は重きに從つて斷罪追賞す」「民間にて舉質し及び欠負の錢を還^{つぐな}うに、其の會子は正しく使用を行ない、百數を減退するを得ず」とあつて、會子の受納と額面價格の維持とを強制する法令が施行されている。會子の使用強制は無制限に行なうわけにはゆかぬ。錢會中半が限度とされたであろう。文獻通考卷九錢幣・會子によると、「紹興三十二年十二月詔。定僞造會子之罰」という記事に續けて、會子の印造手續、會子紙の抄造地、會子行使地、品搭法を述べ、「會子は初めは止だ兩浙に行なうのみ。後また詔し淮浙湖北東西に通行す。亭戸の鹽本の並びに見錢を用うるを除くの外、其の水路を通ぜざるの處の上供等の錢は、盡く會子を用いて解發するを許し、其の沿流州軍は錢會中半とす。民間にて田宅牛畜車船等を典賣するにも之くの如くせしむ。或いは會子を全用するも聽す」と記し、民間の交易では中半までは無條件で使用を認められ、相手の合意があれば全額會子を用いることも可能であつたことを傳えているが、これは乾道四年五月の敕の主旨を採録したものであらう。因みに右の記事の「後又詔」以下は紹興三十一年七月乙未二十四日の詔の節略である。會子紙の抄造地に關する一節には「當時。會紙取於徽・池州。續造於成都。又造於臨安府」と見えるが、臨安府に造會紙局が置かれるのは乾道四年三月のことである。⁽²⁾明らかにこの一段の記事は會子の制度を略述したもので、年代的に相前後する事實が併記されている。

乾道四年前の分數則例で特徴的なことは、人戸の輸納分數を傳えるものが見當らないことである。恐らく輸納分數の規定はなかつたものと考えられる。乾道二年末の會子收回の措置を傳える宋史卷三三同年十一月己酉九日條の記事を見ると「盡く内藏及び南庫の銀を出して以て會子に易う。官司は並びに錢銀を以て支遣す。民間は便に従わしむ」とあつて、官司には會子の支用を禁じながら、他方民間の使用は便にまかすとしている。また皇宋中興聖政卷四六乾道三年正月條の度支郎唐瑑の上言には「今來、諸路の綱運は近降の旨揮に依り並びに十分の見錢を要む。故に州縣は民戸が會子を輸納する

を許さず、流轉せざるに致し（致流轉不行）、商賈が低價にて收買し、行在に輻湊す。六務の支取が擁併喧鬧する所以なり」とあり、中央政府が會子の品搭解發を停止して全額見錢による上供を求めたため、従つて州縣司も人戸の會子輸納を拒んで用途を失つた外路州縣の會子の市價が低落し、これを見た商賈が廉價で收買して行在會子務へ持ち込み、兌換を求めていると述べている。人戸の輸納分數が設けられていた形跡は認められない。恐らく當時の會子は兌換券であつたために、特に會子分數を設けて見錢と區別する必要はなかつたのであらう。後述するように、權貨務都茶場の入納も初めは見錢分數の枠内で任意に銅錢と會子が用いられていた。この見錢分數が更に會子分數と見錢分數とに細分されるのは、乾道二年六月十一日、つまり會子收回の動きが始まつて後のことである。輸納分數の規定が、會子が不換券に改められてのち人戸の利益を保護するために、最低限度この分率までは會子の使用を拒むことは出来ないという意味で設けられたものであることが明らかであらう。まして民間の私交易に對する會子の品搭規制が乾道四年五月前に存在したとは考えられない。

乾道四年五月に施行された錢會中半制は、間もなくまた改制を加えられた。先ず七年正月二十日の詔で、「今より後、諸路州軍より諸色の窠名の銅錢を起發上供するには、並びに七分の見錢三分の會子を起すを要す。並びに人戸が田宅を典賣するなどの交易に錢・會子を用うるは使^便ち民の便に従うを聽す」と、起解分數を錢會七三に改め、民間の私交易に對する分數規制は撤廢された。翌二月十五日には、先述の如く、都茶場會子庫を罷め、內藏南庫の蓄財を放出して官・兵の俸に錢銀を増支する措置がとられる。八年三月十三日には、不係屯軍地の折帛錢は九分見錢一分會子起發、屯駐軍馬地のそれは錢會中半輸納・錢會中半起發と改められた。この改制を奏した戸部の言に「庶くは會子が流轉するを得て軍人の折開を致さざらん」と見える。會子の市價が低落すると兵士の家計は苦しくなり軍中に動搖を與える。そこで多量の會子が使用される屯軍地で會子の輸納解發分數を引上げ、その反面で非屯軍地の會子の品搭分數を減じているのである。明けて九年正月^(一)十九日になると再び錢會中半輸納・錢會中半解發の制に復歸する。

この間の動きは南宋政府の通貨政策が動搖していたことを示している。賢良方正能直言極諫等の科の乾道七年十一月四

日の集英殿における制策（李暉作）の一節に「楮幣の弊を爲すと言う者、一端に非ず。其の弊何を以て拯救せん」と見えるが、當時紙幣の弊害がいろいろ議論されていた。⁽²²⁾

紙幣を運送すれば大幅に脚乘費を節約できる。また紙幣の市價は需要の多い中央大都市で高く外路州軍で低かった。これらのことが地方官司の僞弊を誘發した。乾道二年六月四日の詔に、「訪聞するに、諸州軍は却って人戸が納めたる見錢をば、起綱の脚刺を避免せんとして、會子に兌換して起解すと」見え、六年十二月二日敕に、「訪聞するに、在外州縣の會子或いは損折有れば、其の押綱官は却って合さに發すべき見錢をもつて、水脚を羸落せんとして盡く會子を買ひ、臨安府に前來りて私に見錢に兌えて送納し、反復厚利を羸落すと。是れ會子が復た流轉せざるを致す。云々」と見え、地方州軍の官吏が中央政府に起發すべき見錢をもつて會子を買ひ起綱脚乘費を節約し、また起發州軍にて低價で會子を買ひ臨安市中にて高價に兌換し、その差額を取得していたことを傳えている。また七年六月十八日敕には、「訪聞するに、民間の輸納は抑して見錢を全納せしめ、而うして州郡は屬縣より官錢を解發するにまた分數に依つて行用するを肯ぜずと。今後並びに分數に依りて行使せよ。如し收えて邀難すれば、朝省を経て越訴するを許し、違制を以て論ず。如し官吏が民間より納めたる錢を以て賤價にて會子を收買し利を規れば、並びに贓を計るを與す。云々」と見え、上記の營利活動を行なうために、品搭則例を無視して、人戸から縣司への輸納には全額見錢を求め、縣司から府州軍司への官錢の解發には見錢の増起を求めるなどの弊害が生じていたことを傳えている。

こうした僞弊は會子の正常な流通を妨げる。南宋政府は品搭則例を徹底させようと繰り返し禁令を公布している。乾道六年閏五月九日敕には、「諸路の總領・監司・州軍が錢貫を受納・解發するには必ず錢會各半でなければならぬ（須是會子見錢各半）。仍つて總領・監司には歲終に『本公司が今歲に受納せる州軍の錢貫若干、會子は若干、見錢は若干なり』と具奏せしめ、諸州軍にもまた『今歲某司に解發せる錢貫若干、會子若干、見錢若干なり』と具奏せしめよ。皆それぞれありていに明記し、會子の數を虚裝してはならぬ。今後違戾あれば違制を以て論ず」と見え、錢會中半制の嚴守を命じ、官錢を

起解する州軍とこれを受納する總領所監司の雙方から錢會の實數を報告させることにしている。

六年十二月二日敕では、外路州軍の押綱官が、起發すべき半錢にて低價で會子を收買し臨安市中に到つてまた見錢に兌換し錢會中半として送納していることに對處して、今後起綱の際は、綱解文狀（管押人姓名・綱運數目・起發月日等を記して戸部に飛申する文狀）に起發する錢・會の數目を明記し且つ押綱保官狀に如し保任した押綱官が前記の換易を行なうときは甘んじて同罪に伏すと明記させるように命じ、押綱官や隨綱の篙梢等がなおも共謀して弊をなすときは、諸色の人が所在州縣を経て陳告するのを許し賞錢を與えると言明し、更に「今來會子は務めて流通を要む。如し公法を畏れざるの人が妄りに扇搖する有れば、諸色の人が證を指して着實に陳（告）するを許す。並びに違制の罪を科し、官蔭赦降を以て原減せず」と、扇搖の禁を設けている。

七年六月十八日敕では、縣司は人戸に、州軍は屬縣に、それぞれ見錢の輸納解發を求めていることに對處して、分數の遵守を命じ、州軍司の邀難は縣司が省部に越訴するを許し、官吏の低價買會規利には職罪を科し、監司に對して「今後本司の錢を交收する際は定められた分數に従い、輒りに見錢一色を收めてはならぬ。更に州縣を約束して分數を遵守せしめ、違法は按劾して聞奏せよ。若し監司に違戾・失覺察があつて越訴を受けるときは、先次旨を取つて重く施行をなす」と戒めている。尋いで同月二十九日の敕では、人戸に輸納した錢・會の數目を官鈔に明記させることにして、「州縣にて官物を入納するときは、民戸が官鈔上に分明に『納むる所の某色の官錢、計若干。内見錢若干、會子若干』と聲説するを許す。仍ねて監司州縣には、厩を置き所收の錢・會が各々若干分數なるか分明に抄上して以て不時の差官前去抽摘點檢に備えしむ」と布告している。官鈔は稅物收納の際に用いられた證紙で、縣鈔（官鈔）・戸鈔・監鈔（監生鈔）・住鈔（倉庫鈔）の四紙があり、納戸の姓名・稅目・輸納色額・年月日を抄記して、戸鈔は納戸の、監鈔は受納場の監官の、住鈔は稅物を收納した倉庫の執照に與え、縣鈔は縣の主簿廳に送つて稅簿の勾銷に用いていた。右の敕は、納戸自身に輸納した錢・會の實數を官鈔面に記入させて分數則例を徹底させようとしたものである。

會子の使用に見られる上記の弊害とその対策は、會子の流通を地域的階層的に擴大して普及させるのが容易でなかったことを示すとともに、政府當局者が會子流通の實狀如何に就いて極めて神經質な注意を拂っていたことを示す。吳泳の鶴林集卷一五進御故實「乾淳講論會子五事」によると、乾道四年五月四日、新印の會子を發行するに當つて、孝宗は「朕は昨こころ會子は三二年後には壅併して必ず通快つうかいせざらんと疑う。卿等これを救うの術有りや否や」と幸執に問うている。このような會子の前途を危ぶむ氣持が品搭分數の改制を産んだのであらう。

會子の品搭率の引下げと並行して、淮南を鐵錢行使地とする政策が進められた。この政策は、行在會子の回收が企てられた乾道二年六月から鐵錢交子と鐵錢が發行され三年正月にいたつて停止されたのち暫く中絶していたが、五年秋から再び積極的に推進された。六年には淮西に三、江西に四の鑄錢監が置かれて鐵錢の鑄造が始まり、七年中にはかなりの新錢が淮南に投ぜられた。そして翌八年三月十三日には淮南路の上供錢の品搭則例を見錢（銅錢）七分會子三分から、極邊沿淮州軍は全會起發、近翼州軍は錢會中半起發と改めている。⁽³⁾恐らくこの政策によって江南の銅錢の需給關係を緩和し會子の發行額を抑えようという考えがあつたのであらう。

しかし會子の品搭率を引下げれば、自からその流通は阻害される。そこで九年正月に再び錢會中半制が採られた。宋史卷三九八丘壻傳に「直祕閣知平江府に除せられ、入りて内殿に奏す。因つて楮幣の折閱を論じ、公私の出内(秘)は並びに錢會各半を以て定法と爲さんと請う。詔して其の言を行なう。天下之れを便とす」と見える。本傳によれば丘壻は知秀州のとき華亭縣の捍海堰を修復して平江府に遷っているが、この海堰修復のことは宋會要輯稿・食貨八水利の乾道七年七月十三日及び同年九月十一日の記事に見えている（一五・二九葉）。また平江府の水利を論じた八年六月二日の記事に「其後平江府守臣岳密云々」と附記されている（三〇葉）。右の記事は明らかに乾道九年正月の改制にかかわるものである。

九年正月に中半制が施行されて後、浙東浙西江東路諸州軍に點檢會子官（措置會子官）が派遣され、一年以上にわたつて、官吏俸の錢會中半支遣について戸部の督察が加えられたことは先に述べた。南宋政府の紙幣政策はこの時になって漸

く確定したと言つてよいだろう。翌淳熙元年（一一七四）五月二十日には「民戸・客旅が税賦官錢を輸納し、其の間に零細にして官會の數に湊不及るもの有れば、即ち便に従つて行使せしむ」と、官會で處理できない端錢は中半制の適用を除くという追規が設けられている。

なお起解分數は不通水路州軍では一般と違つた適用を受けていた。紹興三十一年七月、行在會子が初めて淮浙湖北京西路州軍に行使されたときは「其の不通水路州軍の上供等の錢は、盡く會子を用いて解發するを許す」と布告されたが、これは殆んど意味を持たなかつたようである。不通水路州軍には會子はあまり流通しなかつたからである。宋史卷一七四食貨・賦税・隆興元年（一一六三）五月條には、却つて「詔す。溫・台・處・徽は水路を通ぜず。其の二税物帛は、折法に依り銀を以て折輸するを許す。數外に妄りに科折有れば職を計り罪を定む」とあつて、輕齎銀の徵取を指示した詔が傳えられる。この制度はずつと踏襲され、乾道九年正月一十九日敕によつて改められる。敕文には次の二項が見える。

諸路州縣にて應ゆる民張（旅）が輸納する税賦・諸色の官錢は、並びに錢會中半を用つて送納せよ。

州縣より起發する上供等の錢は、合さに輕齎を起すべきものを除くの外、また錢會中半を用つて解發するを許す。

錢會中半輸納と輕齎銀の起發との關係は、宋會要輯稿・食貨七〇賦税雜錄・淳熙三年（一一七六）十一月十二日の南郊赦文に、「人戸の折帛錢は、已に指揮を降して合さに錢・會中半を以て輸納すべきに、訪問すらく、浙東の州縣は舊例を循襲して尙も銀を納めしめ、其の兩數を高くし重だ民力を困しむると。指揮に遵依し只だ錢・會を納めしむべし。其の合さに輕齎を起すべき處は、官司をして自から收買を行なわしめよ。云々」というところから明らかである。嘉定・赤城志卷一六財賦門・上供に、台州の上供錢七千六百七十七貫文に注記して

以諸縣二稅等錢起發。半錢。收買銀子。半會。納左藏庫。「諸縣の二稅等の錢を以て起發す。半ばは錢として銀子を收買し、

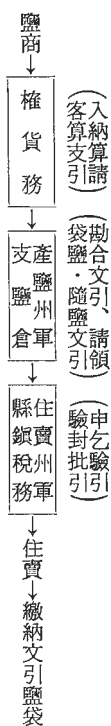
半ばは會とし、左藏庫に納む。」

と見えるのも、この手續きを言うものである。

2 務場入納

會子の收納に大きな力を持っていたのは專賣である。專賣を管掌していたのは權貨務・都茶場で、行在臨安府のほか鎮江・建康府におかれ、權貨務は鹽・礬・乳香の專賣及び曆日・度牒の販賣に當り、都茶場は茶貨の專賣を掌っていた。專賣收入の中で大きな比重を占めていたのは鹽・茶で、紹興三十二年度（一二六二）では鹽が八三%、茶が一〇%、香礬及び雜收入が併せて七%を占めていた。まずは鹽茶の專賣制度の概要から述べることにしよう。

權貨務から出賣された鹽は淮南兩浙の產鹽である。生産地は淮東の通・泰・楚州高郵軍、兩浙の臨安・平江・紹興府・溫・台・明・秀州で、政府はこれらの產鹽地に鹽場を置き、生産に必要な施設を整え、製鹽業者（亭戸）を招募し資金（鹽本錢）を貸與して煎鹽を行なわせていた。鹽場外における煎鹽や亭戸以外の者が煎鹽を行なうのは固く禁ぜられていた。生産された鹽は上記の府州軍と眞州とに設けられた支鹽倉に集められ、支鹽倉から鹽商に引渡されていた。鹽商が官鹽を商販する手續きは下記の如くである。



鹽商は先ず政府發行の手形＝鹽鈔を買わねばならなかった。鹽鈔一枚の單位は鹽一袋＝六石＝三百斤で、鹽鈔一枚を買うと鹽一袋が與えられた。鹽鈔の發賣地は權貨務で、はじめは行在務で淮東路通・泰・楚州高郵軍眞州の鈔と兩浙路秀・溫・明・台州の鈔を、建康務で通・泰・楚州高郵軍眞州の鈔を、鎮江務で臨安・平江・紹興府の鈔を賣っていたが、開禧二年（一二〇六）正月以後は行在務より發賣する淮東の鹽鈔は眞州の鈔に限られ、通・泰・楚州高郵軍の鹽鈔は建康務から賣られることになった。鹽商はそれぞれに商販の便宜を考え、權貨務に赴いて希望の府州軍を指定し、その府州軍の支

鹽倉の鈔を購入していたのである。この購入を入納算請といい、鹽鈔は客算文引と呼ばれた。

鹽鈔を算請した商人が鈔面に指定された支鹽倉に赴いて鹽鈔を呈出すると、預め用意された合同號簿によって鈔引の眞偽を確める勘合（半印合同）が行なわれ、袋鹽（袋に詰め封印を施した鹽）と封記を施した隨鹽文引が與えられた。隨鹽文引はこののち袋鹽が消費者に賣り盡されるまで、その鹽が正しい手續きを経て入手されたことを示す執照に用いられる。その有効期間、つまり袋鹽の販賣期間は一年で、申し出によって半年の延長が許されていた。

鹽鈔の價格を鈔面錢といい、鈔面錢は正鈔錢（正錢）と指留鹽本錢（鹽本錢）から成り立っていた。正鈔錢は專賣税ともいふべきもので權貨務で徵收し、指留錢は鹽の代價で支鹽倉で徵し、亭戸の鹽本錢に支用されていた。鈔面錢の外に通貨錢五貫文（紹興三十年（乾道二年當時）が權貨務で加徴され、また貼鈔錢と稱して諸々の雜費が權貨務と支鹽倉とで添徴されていた。權貨務で添徴された貼鈔錢は頭子錢・市例錢・雇人錢・工墨錢などを含み、支鹽倉のそれは鹽袋本錢・封頭物料錢・雇船水脚錢・別納袋息錢などから成っていた。

鈔面錢の價格は紹興四年（一一三四）當時十八貫省であったが、その後の變化は明らかでない。紹興三十一年（一一六一）四月當時權貨務で徵收されていた正鈔錢通貨錢は合せて十七貫三百文足、隆興二年（一一六四）十月當時では十七貫六百文足であった。乾道元年（一一六五）九月には三貫文省の値上げが行なわれている。寶慶・四明志卷六鹽課には權貨務に入納する鈔引錢（正鈔錢）が二十四貫省、支鹽倉に納める貼納錢が鹽本錢四貫八百文を含めて計六貫三百六十文二分、と傳えられる。

淮浙鹽の販賣區域（行鹽地）は淮南・兩浙・江南・荊湖・京西の八路州軍で、販賣は無論袋鹽・隨鹽文引を併せて他の客商に轉賣されることがあったが、最終的には府・州・縣在城及び稅務所在の鎮市・鄉村墟井において鹽鋪や消費者に販賣された。この販賣方式を住賣という。住賣の際は先ず現地の稅務に出頭して販賣を申請し、隨鹽文引及び袋鹽の檢察と登記を受け、文引の背面に「已於某年月日、驗引驗封、於某處住賣」という印記と稅務監官の親署を受けねばならなかつ

た。住賣を終えた文引（住鈔という）は府・州・縣・鎮の官署に返納することになっていた。⁶³

都茶場が管轄していたのは、兩浙・江東・江西・湖北・湖南・京西及び福建の產茶の專賣である。北宋時代に年產八六五萬斤を數えた淮西の產茶は南宋紹興三十二年度（一二六二）では僅かに二萬斤であつた。北方金國との密貿易を防ぐために生産が抑制されていたのであろう。茶の專賣は、鹽と違って生産に對する政府の統制は一切なく、ただ茶園戸が生産した茶貨を販賣する商人に對して嚴しい統制が加えられていた。

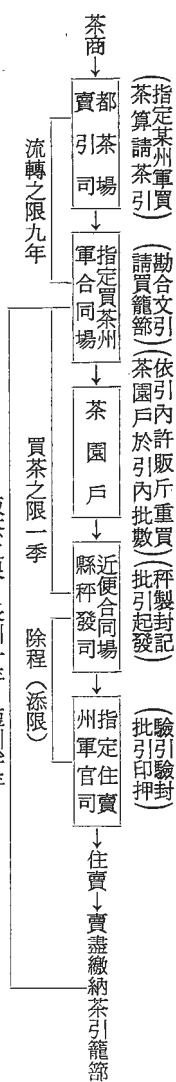
茶貨を商販する者は、鹽と同様に先ず專賣手形即ち茶引を算請しなければならなかつた。茶引には長引・短引・小引の三種があつた。長引には草茶・末茶・臘茶の別があり、草茶長引は引錢（正鈔錢）が二十三貫省、頭子・市例・工墨・雇人等の貼納錢を併せて二十四貫四百八十四文省で、この茶引一枚を買うと草茶百二十斤の商販が許された。末茶長引は引錢が二十六貫省、貼納錢を併せて二十七貫六百七十七文省で、許販斤重は草茶同様百二十斤である。草末兩種の長引茶の商販は長引路分で行なわれた。長引路分は淮南・京西路である。福建臘茶の長引には草末茶とは違つた規格が用いられていたが、その詳細は明らかでない。商販は北方金國への密賣を防ぐため、長江以南の諸路、即ち短引路分に限って許されていた。短引は草茶末茶ともに引錢が二十二貫省、貼納錢を併せて二十三貫四百一十九文省で、これを買うと草茶なら百斤、末茶なら九十斤の商販が許された。商販地は長江以南の諸路即ち短引路分である。小引は、南宋初めの建炎三年（一一二九）九月に北宋の制度にならつて引錢五貫・許販茶六十斤の食茶小引が發行され、產茶地内の一州軍界内に限つて商販が許されたが、この小引は短引との價格の釣合いが取れないということで一年で廢止された。淳熙二年（一一七六）になると、小商人の便宜を圖つて長引短引を引錢四貫省に細分した小引が發行された。これは小額面の長引・短引である。

茶貨の商販は下記の手續きに從つていた。

は省く。

鑒は淮南路無爲軍、江東路信州、廣東路韶州に産地があり、茶鹽と同様に手形（鑒引）を使って出賣されていた。詳細から除外された。茶籠節購入から引茶賣盡までの販茶の限は長引で一年、短引で半年である。⁸³⁾

茶商は先ず都茶場もしくは賣引官司に赴いて茶引を算請した。茶引は例えば「江西路江州草茶長引」などの如く産茶州軍それぞれに就いて草茶末茶の長引・短引・小引が用意されていて、茶商は希望する州軍と茶引とを指定して算請していた。茶引の算請を終えたと、指定した州軍の合同場に出頭し、茶引の勘合を受け、官製の茶籠節（茶貨の容器）を買い、茶引と籠節とを持って茶園戸を訪ね茶貨を購入した。茶貨の購入は茶引の許販斤重の限度内で行なわれ、茶園戸が賣與した茶貨の色號（銘柄）・斤重・價格・園戸姓名を引面に記入することになっていた。價格に對する統制はなかった。茶貨の購入を終えた茶商は、その場所から近便の合同場か、もしくは縣署の秤發司に出頭して籠節茶の秤量封印を受け、長引茶であれば淮南路西路内の一州軍を、短引茶であれば茶貨を購入した路分内の一州軍を住賣地に指定し、引面にその記入を受けて商販に出發した。住賣の手續きは鹽の場合と略々同様であった。なお長引は翻改・翻引と稱して住賣地を變更することができたが、短引は最初の住賣地で引背に「此引不得重疊與販」と印記され、更に別州軍に移って住賣することは許されなかった。茶引の行使期限は、先ず茶引算請時から流轉の限が起算された。期限は九年で、この間茶引は有價證券として取引することができた。茶籠節を購入すると買茶の限一季が起算された。秤發地から住賣地までの旅行期限は行使期限から除外された。茶籠節購入から引茶賣盡までの販茶の限は長引で一年、短引で半年である。⁸³⁾



建康務場は鹽鈔一枚當り五貫文の通貨錢を見錢で納める外はすべて輕齋、鎮江務場はすべて輕齋とされていた。輕齋は行在務場では金・銀・關子が、建康・鎮江務場では金・銀・關子・公據が、商人の便宜に従って用いられ、輕齋物色（物）それぞれの分數は定められていなかった。

乾道二年（一一六〇）以後の分數則例は、この隆興二年時の則例に修正を加えて出來上つたものである。先ず乾道二年六月十一日の改制は、この新例を擬定した戸部の上言に「旨を被るに、諸路より發納する綱錢は二分會子・八分見錢を以て起發すと。本部今見行の錢（鈔）引を算請するの舊法下項を參酌したり」と言うところから明らかなように、この年六月四日の租賦官錢の起解分數の改制に相應じてなされたものである。その眼目は從來規制のなかつた見錢と會子との分數を設定して見錢收入を確保することにあつた。戸部の上言に

行在權貨務都茶場算請。依自來指揮。茶・鹽・礬見係六分經齋。謂金銀關子。四分見錢。目今多用會子。乳香。八分輕齋。謂金・銀・關子。二分見錢。目今多用會子。至左藏關少見銀品搭支遣。今欲。將前項合納四分二分見錢分數。各以搭分爲率。許用五分見錢五分會子算請。〔行在權貨務・都茶場の算請は、自來の指揮に依り、茶・鹽・礬は、見、六分經（輕）齋（金・銀・關子を謂う）四分見錢（目今、多く會子を用う）に係わり、乳香は八分輕齋（金・銀・關子を謂う）二分見錢（目今、多く會子を用う）とし、左藏は見銀（錢）の支遣に品搭するものを關少に至る。今欲す。前項の合さに納むべき四分二分の見錢分數をば、各々搭分を以て率と爲し、五分見錢五分會子を用いて算請するを許さん。〕

建康權貨務都茶場。自來除每袋五貫文通貨錢並納見錢外。餘以金銀公據關子入納。所有合納通貨見錢五貫文。其間多用會子。今欲納一半見錢一半會子算請。〔建康權貨務・都茶場は、自來、每袋五貫文の通貨錢の並びに見錢を納むるを除くの外、餘は金・銀・公據・關子を以て入納す。所有合さに納むべき通貨見錢五貫文は、其間に多く會子を用う。今欲す。一半の見錢一半の會子を納めて算請せしめん。〕

と見えている。見錢分數を會子で納める者が多くなり、そこで初めて見錢と會子とが區別されたわけであるが、但しこの

背景には會子の發行を抑えようという政府の意圖があつた。會子の發行を抑えるには、より多くの見錢が必要である。尋いで七月五日の詔によつて、貼納鹽錢每袋三貫文を見錢で入納させているのも、同じ意圖に由るものである。なお鹽價每袋三貫文の添増は乾道元年九月十五日から行なわれていたものである。

二年十一月になると行在會子の回收が始まるが、務場の入納則例はそのまま存置されたようである。新會子發行後最初に行なわれた改制は、輕齋分數の枠内に銀兩の分數を設定するものであつた。乾道八年十二月二十九日の戸部の上言に「乞うらくは、行在權貨務都茶場にて茶鹽を算請するものに、六分の輕齋の内、須管二分の銀兩を用いて入〔納〕せしめよ。鎮江建康務場も此れに依り二分の銀を用いて入納せしめよ。云々」とあり、これが九年正月一日から施行されることになった。九年五月二日になると、本色銀の分數が四分に引上げられる。同じく戸部の上言に「乞うらくは、行在權貨務都茶場にて茶鹽を算請するものの内、六分の輕齋は、關子三貫を用うるを許すの外、並びに四分の本色銀兩を用いしめ、餘は餘銀會子^(金)を用いて便に従つて入納するを聽せ。餘は並びに見行の條法に依らん。鎮江建康務場も此れに依れ」とあつて、これが裁可されている。

この改制は明らかに乾道八年二月の兵俸の支遣分數の改制に連動するものである。兵俸の支遣に必要な銀兩を確保しようとして先ず本色銀二分の分數を設定したが、それでも足りないことが判つて四分に引上げたのであろう。但し舊輕齋分數の中に本色銀の分數を設定した理由は他にも在る。先に述べたように、この時期南宋政府の通貨政策は漸く固まり、乾道九年正月十九日の詔であらゆる官吏の俸給を錢會中半支遣とし、租賦官錢の輸納解發も錢會中半制を採り、兩浙江東州軍に點檢會子官を派遣して會子の行用地の擴大を圖っていた。上記の改制は、必要な銀兩を確保してその餘の輕齋分數は金銀會子從便入納とし、この分數を會子の行用地に開放してその流通を圓滑にしようとしたものであろう。なお九年五月の新例に言う關子の正體は明らかでない。和羅本錢の降付に見錢關子を用いるのは乾道四年五月以降罷められている。だから關子の行使期限三年を加算しても七年中には關子は流通界から姿を消していたはずである。上記の關子が何處で何

に用いられたものであったか、後考にまつ外はない。

隆興二年時の則例に隨時修正を加えつつ乾道九年までこれを踏襲した後には、恐らく金・銀・錢・會子の分數値の整理が行なわれたものと推測されるが、残念ながら淳熙以降の文獻でこの分數値を傳えたものは見當らない。判るのは品搭物色だけである。例えば、宋會要輯稿・食貨三・茶法雜錄下・紹熙元年（一一九〇）五月十六日條に、「兩浙江東路州軍の四貫例の長短の小引を出賣するに當つて、戸部より『今若し大引見使の金・銀・會子の分數に依りて品搭して算請せしむれば、恐らくは小客は以て變轉與販し難からん』と上言しているのや、同書食貨二・鹽法・嘉定五年（一二二二）二月十四日條に「詔す。行在・建康・鎮江の三務場、眞州の賣鈔司は、三月一日より始めとし、並びに自來の定例に照らして官錢を入納せしむ。うち行在務場は金・銀・錢・會・見錢を用い、建康務場は交・會・見錢を用い、鎮江務場は錢・會を用い、眞州賣鈔司は交・會を用う。云々。」とあるのがそれである。なお支鹽倉で納める鹽本錢や貼鈔錢には租賦官錢の輸納分數が適用されていた。⁶⁹

最後に三務場で幾何の會子を收納できたか、大まかな推計をしておこう。乾道六年三月立定の三務場の歲課額は行在八百萬貫、建康一千二百萬貫、鎮江四百萬貫、計二千四百萬貫である。乾道九年五月の則例に據つて考えると、本色銀四分相當の錢額は九百六十萬貫、行在務場の二分見錢の總額が百六十萬貫、建康務場の通貨錢の一半の見錢は、建康務から出賣される淮鹽が四十八萬袋であるから百二十萬貫となる。⁶⁹ 以上の合計が一千二百四十萬貫である。淮浙鹽一袋當り三貫文の見錢の總額は、乾道六年度の販賣額が淮東鹽六十七萬二千三百餘袋、兩浙鹽二十萬二千餘袋であるから、八十七萬四千袋として計算すると二百六十二萬二千貫となる。殘額は九百萬貫ほどになる。文獻通考卷九錢幣・會子をみると、紹興三十一年會子務を都茶場の管下においたことを記した一項に、「正さに以えらく、客旅が茶鹽香鑾等を算請するもの、歲に一千萬貫を以てすれば、以て陰かに稱提を助くべしと。獨り見錢に待みて以て本と爲すのみにあらず。また全て會子に仰ぎて以て國用を佐くるに非ず」と、編者の意見を附記している。この一千萬貫は根據のある數字と見てよいであらう。

戸部の歳入上供錢額は淳熙二年（一一七五）當時で一千二百萬貫であるから、中半の會子は六百萬貫となる。⁽⁴¹⁾林駟の古
今源流至論續集卷三賦税に、戸部千九百萬貫、淮東總領所二百六萬貫、淮西總領所三百七十八萬貫、湖廣總領所五百七萬
貫と諸路常賦歲入緡錢の配分を記すのは、嘉定十年（一二一七）時の統計のようであるが、かりにこれを援用すれば、三
總領所で五百餘萬貫、淮東淮西兩總領所では二百八十餘萬貫の會子が收納できたことになる。務場課利と諸路常賦とを合
せて年間に二千數百萬貫の會子が收納できたはずである。

三 收支兩分數の關係

收支兩面の品搭分數は、無論收支の均衡を壞さぬように調整されていた。會子の使用量が増えたと收納分數が引上げら
れ、逆に會子の支出が抑えられると收納分數が引下げられているのは、その現れである。もっとも會子發行の初めから完
全な收支計畫があつたとは考えられぬ。紙幣の收支管理法は、現實の必要に迫られて紙幣を發行し經驗を重ねるうちに、
次第に整えられていったはずである。乾道八年二月の諸軍俸支遣分數の改訂に應じて行なわれた收納分數改制の作業は、
南宋政府のこの經驗の一つと云うことができるであらう。

宋會要輯稿・食貨五一度支庫・乾道八年二月一日條によると、「戸部尙書曾懷・侍郎沈復言う。指揮に准るに、毎月の
券食は錢銀を増支し會子を減落せよと。今下項を具す。云々」とあり、兵俸の錢銀分數を増添せよという朝廷の指揮を承
けた戸部が五項の措置を擬定して今後の方針を上言し裁可を得たことが記されている。五項の措置と上言の主旨は下記の
如くである。

- (1) 〔江浙⁽⁴²⁾〕路諸州軍が起發すべき折帛錢并びに寬剩折帛・折帛頭子錢は、今年の受納の日から九分見錢・一分會子
を以て解發させ、且つ折帛錢は紬・絹・絲・綿四色それぞれ折錢分數二分を増し、合せて見錢一百七萬六百餘貫を
增收する。尙これまで折帛錢二十六萬餘貫を割いてきた外路の支費には、諸州より行在に起發される經總制窠名の

同額の會子を充てることにする。

(2) 臨安府が起發すべき折帛錢は、今年の受納の日より三分の一を見錢、二を會子で解發させ、見錢二十萬餘貫を増收する。左藏西庫で受納している雜納錢官告綾紙等の錢は、四月以降全額見錢送納と改め、一百萬餘貫を得る。

(3) 諸軍券食錢の支費として、行在務場より左藏西庫へ配與されている毎月三十萬貫の課利に、十月以降、本色銀二分を品搭させ、これによって年間に二十一萬餘兩の銀を得る。

(4) 錢・銀の支遣分數は、從來より増減があつて一定していない。將來若し錢多く銀が乏しいようであれば、見錢分數を増して支遣することにする。

(5) 已に指揮を承けて銀兩の分數を増して支遣した結果、市中には銀兩多く價格も從つて低平である。本部は以前にも銀兩が不足して和買場を置き民間より收買したことがあるが、將來若し銀兩が闕乏したら、綱運錢會や酒庫より起發された錢會をもつて、その都度收買して支給することにする。

今回、毎月四十萬貫の會子の支遣を減じ、年間に四百八十萬餘貫の錢・銀を増支することになった。このうち見錢の増支額は一百八十萬貫であるが、二月分の支遣実績からすると實増額は一百五十六萬餘貫にとどまり、上記(1)(2)項の措置によって見錢一百四十七萬餘貫を得るから、⁽⁴³⁾實際の不足額は九萬餘貫である。銀兩の増支は年間九十六萬餘兩となり、歳計の剩數四十二萬餘兩と(3)項の措置による增收を合せても尙三十三萬餘兩が不足するが、綱運その他によつて戸部に收納した會子に、經常支用の外に一百八十萬餘貫の餘剰が出て銀五十萬餘兩を收買できるので、これで補なうことにする。

(5)項に「已に指揮を承けて、云々」というのは、周必大の乾道八年二月三日の奏に「陛下は幣券が^{はなは}大だ輕きを以て日夜之れを憂い、一旦、内より積鎰を出すに百萬計を以てし、之れを權するの術を爲す。旬日來、軍民既に實惠を被り、權呼の聲行都に徧ねし」とあるように、⁽⁴⁴⁾内藏の蓄財を出して兵俸に錢銀を増支したことを指している。右の措置は、先ず兵俸

の錢銀支遣分數を定めて、必要な錢銀を調達すべく收納分數に調節を加えたものである。

この條奏に従つて先ず實施されたのが、折帛錢の起解分數の改訂である。慶元條法事類卷三〇財用門・錢會中半・隨敕申明・廩庫に「乾道八年三月十三日の三省樞密院の劄子。戸部より奏して乞う『屯軍に係わらざる處より折帛錢を起發するには、九分見錢一分會子とし、其の畢(軍)馬を屯駐するの處は、錢會中半を以て交收し、また中半を以て省部に發納せしめん。庶わくば會子が流轉するを得て、軍入(人)が折閱するを致さざらん』と。聖旨を奉ずるに『依れ』と』とある。一見して(1)(2)項の條畫を具體化したものであることが明らかであろう。尋いで行なわれたのが務場入納分數の改訂である。(3)項の措置で、行在務場より戸部へ配與される月額三十萬貫の課利に、二年十月以降は本色銀二分を品搭することになつてゐた。三年正月一日以降務場の入納に本色銀二分を要求したのは、これを具體化したものであろう。但し戸部の措置では銀兩はなお三十三萬餘兩が不足し、その不足額は戸部の餘剩會子百八十萬貫で民間より收買する計畫であつた。この計畫が實行できたとは到底考えられぬ。九年五月に更に本色銀の分數二分を増搭しているのは、この銀兩の不足を補なうものであつたと見て誤らないであらう。

おわりに

乾道四年五月に不換券を發行してのち、南宋政府が會子の流通状況を注意深く見守りつつ財政の收支兩面における品搭分數に調節を加え、地域的階層的に、徐々に會子の流通圏を擴大してきたことが明らかであろう。南宋末咸淳八年(一二七二)に係る知撫州兼江西提舉黃震の申狀に、⁽⁴⁵⁾「楮幣の行なわるるや、朝廷の法にては、其の他の入納は斷斷乎として皆違うべからざるも、獨り民間が自から行なう交易の一項のみは、之れに人情を參じ、云々」と見え、また知寧國府杜範の淳祐八年(一二四八)の上奏の一節に「且つ銅・楮並び行なわること、其の來たるや已に久し。朝廷の給賜、州縣の上供、民間の入納、並びに半錢半楮を用う。是れ固より不易の法なり」と見えるが、行在會子の品搭制度は發行五年後の乾

道九年に至って略々整えられたと見てよいであろう。

紙幣を流通させるについて品搭制度が果す役割は、四川交子（錢引）の経験によって多くの人に知られていたと考えられる。紹興六年（一一三六）行在交子の發行が企てられたとき、これに寄せられた批判の中に、既に「或いは民間に行ないて而も之れを官庫に納むるを許さず、或いは諸路に行ないて而も之れを上供に充つるを許さぬ」などのことがあれば紙幣は流通しないであろう、という意見が見えている。しかしながら國土の中樞部で紙幣を用いるには邊境の四川とは比較にならぬ重壓が加わる。紙券を使えば紙券を受納せねばならぬ。紙券を受納すれば危急時の國庫の財もやはり紙券となる。これが長く政府首腦を迷わせた原因である。

會子の額面の價格が品搭制度によって保證されていたのであれば、その流通の徑路は自から限られる。官吏將兵の給與や軍糧の和糴を通じて民間市場に放出されたものが租税の徵收や茶鹽の專賣を通じて再び國庫に回收され、この回流徑路に沿って民間で使用されていたはずである。辛棄疾の「淳熙乙未（二年・一一七五）登對劄子」に「今いわゆる會子を行使するの地は、大軍の屯駐する所と畿甸の内の數郡とに過ぎず。村鎮鄉落など稍々城郭に遠き處は已に行使せず。其の他の僻遠の州郡また知るべし」というのは、會子の流通が漸く緒に就いた時期にかかわるものであるが、それだけによく流通形態の特徴がとらえられている。この問題は次の機會に詳しく考えることにしよう。

註

- (1) 拙稿「南宋行在會子の發展」上・下、東洋學報四九―一・二、一九六六年、を參照。
- (2) 彭龜年・止堂集卷一論雷雪之異爲陰陽之證疏（紹熙二年・一一九一・二月）を見よ。
- (3) 冊府元龜卷一五五帝王部督吏門に記す前漢武帝時の沈命法への註記を見よ。宋會要輯稿・食貨二七鹽法・隆興元年正月十九
- (4) 本稿はもと註(1)拙稿の續篇として「南宋乾道淳熙年間における東南茶鹽の專賣と紙幣の流通」と題して書いたもので、同じ表題で一九六六年の或る學會で発表したことがある。本稿はこ

の舊稿の前半である。なお品搭制度の意義は、別に拙稿「南宋時代淮南路の通貨問題」東洋學報四四・四、一九六二年、において淮南父子に就いて論じている。併照を乞う。

- (5) 樓鑰の攻媿集卷八五先兄嚴州(諱錫)行狀に「任滿。主管都茶場會子庫。關陞右從政郎。上方留意楮幣。兄服勤其中。纖悉明備。凡事皆立成規。吏不得搖手。日造萬紙無不精好。一日謁丞相曾公。有同僚力言省罷之便。兄立其後具聞之。僚顧見兄蹶躍而退。兄亦不之辯。果罷。已又進謁。白相君曰。國家賴楮幣以資用度。今罷已。何敢復言。然度必復于後。吏曹失業。散之四方。他日恐難遽集。況作僞者。他皆可爲。惟貫百例不能亂眞。故多敗。此曹無聊。若冒爲之。智者不察也。願擇可用者。分隸官司。使得以自活。丞相曰。子不謀身而遠慮及此。即白于上。如兄言」と見える。曾丞相とは曾懷を指す。曾懷の丞相就任期間は乾道九年十月から淳熙元年十一月までである。右は後年の官職を以て表記したものである。

- (6) 宋會要輯稿・食貨五一度支庫・同日條。
(7) 同書・瑞異二火災・同日條。
(8) 皇宋中興聖政卷五三同日條。

- (9) 本稿と目的は異にするが、この問題は加藤繁「南宋時代に於ける銀の流通並に銀と會子との關係について」(一九四四年)の第五項「俸祿と銀」で論ぜられている。略々史料も揃っていて筆者が新に附け加えたところは多くはない。『支那經濟史考證』下卷、東洋文庫、一九五三年、一三三—一三四頁参照。

- (10) 原文は「奏乞公稱易見續付本軍」とある。公稱の二字は衍字であらう。

- (11) 註(1)拙稿下、三九—四二頁参照。但し「時會子初行」の一句の解釋は本稿の如く改める。

- (12) 註(9)加藤論文では三衙の下級將校と記すが従い難い。後述參照。

- (13) 宋會要輯稿・職官五七俸祿雜錄・紹興三年九月十九日條、乾道九年六月十二日條、同書・兵二四馬政・紹興二十八年七月二十八日條を參照。

- (14) 朝野類要卷三入仕「歸附等」に、「歸正、謂元保本朝州軍人、因陷蕃後來歸本朝」とある。

- (15) 宋史卷一九四兵志・虞給之制、紹興十三年條、建炎以來繫年要錄卷一四九同年六月壬辰七日條。

- (16) 例えば吳泳・鶴林集卷一五進御故實「乾淳講論會子五事」に「(淳熙)六年輔臣進呈。權戶部侍郎陳峴言。契勘每月大軍支遣會子。昨緣折閱。以見錢銀兩抵換。云々」と見える。錢・銀の分數に相互に融通増減があつたことは本稿三節所引史料を參照。

- (17) 建炎以來繫年要錄卷一〇一紹興六年五月乙酉十八日條附記四月辛丑降旨參照。

- (18) 周藤吉之「南宋末の公田法」(『中國土地制度史研究』一九五四年、東京大學出版會、五五〇・五五七頁)を參照。

- (19) 宋史卷三四孝宗紀參照。

- (20) 蔡戡は乾道二年の進士で(本集解題)、淳熙十年七月に淮西總領に到任、同年十一月に湖廣總領に轉じている(景定建康志卷二六官守志)。この擾民四事劄子は和羅の外に造甲、沙田の根括起租、鄉民の教閱が論ぜられているが、南宋で沙田の根括起

租が行なわれるのは紹興末と乾道六年二月である。劄子の沙田の議論は一節に「一昨朝廷委官根括盡行起租」と見え、その内容は宋會要輯稿・食貨六三農田雜錄・乾道八年七月七日條と一致する。また宋史全文續資治通鑑卷二五乾道九年六月己巳條の臣僚の上言には、近年の州郡凋弊の因十一事として「指價和糴米之備償、打造歲計之鐵甲、拋買非泛之軍器、教閱民兵保甲之支費」が挙げられる。

(21) 咸淳臨安志卷九造會紙局を参照。

(22) 宋會要輯稿・選舉一一舉賢良方正能直言極諫等科・乾道七年十一月四日條。

(23) 同書・食貨四四漕運・同年月日條。

(24) 同書・食貨四五綱運令格・同年月日條。

(25) 慶元條法事類卷三〇財用門・錢會中半・同年月日條。

(26) 前註に同じ。

(27) 註(24)に同じ。

(28) 註(25)に同じ。

(29) 慶元條法事類卷三〇財用門・錢會中半・同日條。

(30) 稅租鈔に就いては周藤吉之「宋代における稅租鈔」(『宋代史研究』一九六九年、東洋文庫、所收)を参照。

(31) 拙稿「南宋時代淮南路の通貨問題」(『東洋學報』四四・四、四五頁)参照。鐵錢が普及した淳熙七年(一一八〇)には内藏庫への綱運は銀會中半と改められる。同上五〇頁参照。

(32) 慶元條法事類卷三〇財用門・錢會中半。

(33) 拙稿「南宋時代の淮浙鹽鈔法」史淵八六輯、一九六一年、は細かい點で誤りがある。

(34) 茶引は都茶場の外に、鄂州・襄陽府・隆興府・江州・撫州等で賣られていた。この問題は次の機會に論ずることにする。

(35) 茶法に就いては別稿を用意している。

(36) 本稿と目的は異にするが、この問題は註(9)加藤論文でも論ぜられている。参照されたい。なお乳香の入納分數は後引の史料を参照。

(37) 隆興二年の記事では「(輕贗)係金・銀・會子之類」と記すが、會子は關子の誤りである。加藤論文はこれを原文のままに信じて別な誤りを犯している。

(38) 宋會要輯稿・食貨二八鹽法・紹興三年(一一九二)閏二月二十九日條に「已降指揮。令淮東提鹽司。將客人合納鹽本等錢。權用四分會子六分見錢。候會子流通日。却用錢會中半入納」とあり、寶慶四明志卷六敍賦・鹽課に「貼納錢每袋六貫三百六十六文二分。錢會各半」とあるを参照。なお淮東の特例は註(31)拙稿参照。

(39) 註(31)拙稿五七頁参照。

(40) 宋會要輯稿・食貨二七鹽法・乾道七年六月十七日條参照。

(41) 皇宋中興聖政卷五四淳熙二年夏四月壬子朔條、註(6)所引鶴林集を参照。

(42) 原文には路名を缺く。宋會要輯稿・食貨六四上供・乾道八年八月四日條を参照。

(43) この數字は(1)(2)項合計とは異なる。恐らく雜納綾紙錢から原價(工錢及び材料費)が差引かれているのであろう。

(44) 周益國文忠公集・奏議卷三垂拱殿對一首。

(45) 慈溪黃氏日抄分類卷七六申臺戶部戴槐妄訴狀。

- (46) 杜清獻公集卷八便民五事奏劄。
 (47) 建炎以來繫年要錄卷一〇一紹興六年五月乙酉十八日條附記三

- (48) 月癸巳降旨。
 稼軒集鈔存卷二所收參照。

transformed into coercion. Therefore, the labor of this substitute cultivation became a kind of compulsory labor services. The substitute work too was obtained essentially through force.

The central government relied upon conditions of social interdependence which actually already existed within the *jia* in causing the *linbao* to assume such a function. At the heart of the *linbao* (in other words, within the regional society), there was just such a strong economic and social association and mutual interdependence for survival growing from the bonds of blood relationships. Under the pretext of reprimanding the local society for the occurrence of an abandoned household, the state assumed the already existing custom of mutual assistance practiced by peasants.

What is commonly called the abuse of *tantao* in the *linbao* is merely the result of regional officials having made this an unlawful activity.

THE *PINDA* 品搭 OF INCOME AND EXPENDITURES IN *HUIZI* 會子 IN THE SOUTHERN SONG ECONOMY

KUSANO Yasushi

The *xingzai huizi* 行在會子 of the Southern Song government were changed into non-convertible coupons in the fourth year of the *Qiandao* 乾道 period (1168). These non-convertible coupons could yet better preserve their face value and circulate in the markets because the central and provincial governmental agencies had accepted these *huizi* at their face value, just as they would have accepted *xianqian* 見錢. When the government issued the *huizi*, it established the precedent regulating the rate of usable *huizi* in each item of the income and the expenditures paid in *xianqian* at the government treasuries. Following this precedent, the *huizi* was used together with copper coins and silver taels.

Pinda refers to the using of various kinds of money according to a rate. In this expression, *pin* 品 indicates rate, while *da* 搭 indicates the process of lumping together. The principal items of expenditure were officials' salaries, military officers' salaries, and military provisions. The

items of income included all tax payments made in cash, such as *zhebo-qian* 折帛錢 and *jingzongzhiqian* 經總制錢, as well as proceeds from the monopoly of tea and salt. The supervisor in charge of the finance watched over the circulation of the *huizi* and added adjustments to the *pinda* rates of both income and expenditures.

Up until the ninth year of the Qiandao period (1173), the government roughly built up this system of income and expenditures. Thus, the *huizi* enlarged its range of circulation, centering itself around the *xingzai* and the areas stationing large troops, and secondarily extending into the surrounding regions.

THE VIZIRATE DURING THE LATTER HALF OF THE FĀTIMID DYNASTY IN EGYPT

UHARA Takashi

This essay investigates the actual conditions of the vizirate during the latter half of the Fāṭimid dynasty and systematically comprehends its character in an attempt to consider its historical significance.

When one traces the transition of the latter vizirate, the following points are confirmed: first, that all the viziers had come from the military class; secondly, that in most cases they had had direct or indirect recourse to military force in establishing their accession; and thirdly, that the entire climate of the political process during the latter period mostly evolved around the vizier.

Speaking from an institutional perspective, the vizier controlled the highest authorities of the army, the administrative organization and the organization for religious affairs. The vizier was the actual controller of the state. Their supreme position is also verifiable from other aspects, including their exceptional remuneration, supervision of the *maẓālim*, high status in ritual ceremonies, hereditary political position, and title of *malik*.

The latter viziers who possessed such a great jurisdiction, occupying such a supreme position, threatened the supreme spiritual authority of